

お茶園展望台 (ウェブサイト用)

鳴門公園のお茶園展望台は静穏な場所にあり、そこから鳴門海峡と有名な渦潮、壮大な大鳴門橋とその先にある淡路島、手付かずの自然が残る小さな飛島、鳴門市に向かって起伏する緑の丘陵などなど、パノラマの景色を楽しめます。その規模こそささやかではありますが、お茶園は日本の過去数世紀にわたる魅力的な歴史と深く絡み合っています。

この場所の話は大名の蜂須賀氏にまで遡ります。蜂須賀氏は 1585 年から 1871 年まで徳島藩を支配していました。その領地は現在の徳島県を含み、それに加えて 1615 年からは淡路島も組み込まれました。蜂須賀家の歴代大名は時を超えた絶景である鳴門の渦潮を楽しむため、徳島城から船でここを訪れていました。大名たちはさまざまな仮設の建物（その中には「お茶園」という名前の由来になった茶室も含まれています）を築き、船釣りを楽しみ、自分の牧場を近隣に設置しました。ですが支配者階級の不在時には、庶民がお茶園に集まって渦潮を眺めたものでした。江戸時代後半（およそ 1800 年 - 1867 年）になると、裕福な商人や文人らが船を借りて、観潮も行われるようになりました。その様子は詩、絵図、道中記に詳しく描写されています。

1868 年の明治維新を受けて、武士の支配が終焉を迎え、権力は天皇のもとに戻りました。首都は京都から東京に移転し、日本は急速な西洋式近代化への計画を開始しました。鳴門海峡は軍事利用の目的で要塞化されたものの、丘は有名な渦潮を見にやって来る観光客のために開放され続けました。

お茶園の周辺エリアは 1945 年に第二次世界大戦が終わるまで軍事施設のままでした。それに続く平和と繁栄の数十年間に伴って国内外からの観光も飛躍的に増加し、そのおかげでお茶園もいっそう利用しやすくなりました。展望台は現在、ここへやって来る全ての人々に大名レベルの景色を見せてくれます。